

活動成果報告書

平成26年度（第18回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ

地域が子育て！

～水島の地区特性を生かした子育て支援の場づくり・人づくり～

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

水島支所 水島保健福祉センター 水島保健推進室

代表者：吉田 康子

勤務先：水島支所 水島保健福祉センター

所 属：水島保健推進室

所在地：〒712-8565

岡山県倉敷市水島北幸町1-1

TEL：086-446-1115

FAX：086-446-1153

E-Mail：nsc-mz@city.kurashiki.okayama.jp

各学区のプチ子育て
Caféの様子



◇活動方針

倉敷市は「子育てするなら倉敷でといわれるまち」の実現をめざしており、水島地区においても親子が安心して子育てできる環境づくりに積極的に取り組んでいる。

水島地区は、約60年前から企業誘致を行い発展してきたまちであり、石油コンビナート・工業地帯として40箇所以上の大企業の事業所が立地している。近郊の住宅地には通勤の多い企業労働者やその家族が入居しやすい賃貸形式の住居が多く立ち並んでおり、労働に伴い転出入をする世帯にとって比較的都合のよい環境であると言える。

一方、大正期以降に廃川地を順次干拓・埋め立てて造成された新しいまちでもあるため、長年居住している地域住民と転入者との関係が築きにくいという特徴があり、市内の他地区に比べて町内会などのコミュニティ組織が弱いという背景がある。身近な生活圏内でコミュニティ形成が難しいため、子育て中の親子を取り巻く問題も複雑かつ深刻化しやすく、虐待にいたるケースも市内の他地区に比べて多い現状がある。

このような水島地区の特性から来る現状を改善するため、“親子が生活の中で自然（当たり前）に見守られる地域”を目指し、“地域が子育て”していると言えるようなまちづくりを展開していくこととする。そのために、水島地区における子育ての現状と課題を地域住民と共有し、子育て支援者を増やしていく必要がある。

◇活動内容

1) 場づくり（地域住民が主体となって運営する社会資源の充実）（H14～H22年度）

目的：水島地区は長年居住している地域住民と転入者との関係が築きにくい地域の特性がある。そのためより身近な地域住民同士を“つなぐ場”としての効果が期待できる「子育てサロン*1」の充実が必要であると考え、一般住民や子育てキーパーソンへの働きかけや支援を実施する。

内容：① 子育てサロン活動の活性化・地域への定着を目的とした既存の子育てサロンへの働きかけ

② 愛育委員*2が水島地区の現状を知り、自分たちができる子育て支援の実践に結びつけることを目的とした愛育委員への働きかけ

活動成果報告書

成果：既存の子育てサロンは自主組織としての成熟度があり、現在13学区中9箇所の子育てサロンが自主的に活動できるようになった。愛育委員も子育てサロンの立ち上げに携わり、地域への普及活動に意欲的になっている姿があった。実際に、H24年度に実施した子育てサロンを利用している利用者へのアンケート調査では、「参加してほっとした気持ちになった」の項目が98.7%、「仲間づくりの場になった」の項目が91.9%等と満足度が高くなっている。また子育てサロン利用者のうち居住年数が3年以下の親子が48.8%を占めており、「地域住民と転入者がつながる場」としてねらった対象者が実際に利用してくれているということがわかった。

*1 子育てサロン：地域住民が主体となって運営し、子育て中の親子が自由に集い、交流や仲間づくりを行う場。

*2 愛育委員：保健福祉行政への協力や自主活動を行う生涯にわたる健康づくりを推進する地域の健康ボランティア。

2) 人づくり（地域の子育て支援者同士の交流や情報交換を通して行う人材育成）（H14～H26年度）

(1) 「子育てサロン」の運営者をエンパワメントした取り組み（H14～H21年度）

目的：子育てサロンの運営者が、円滑に運営を行い、地域にも目を向けて子育て支援に取り組んでいけるよう人材育成を行う。

内容：① 子育てサロンの立ち上げ当初から、保健師が運営者に対する相談やアドバイスを継続

② 子育てサロン交流会を実施し、運営者同士による情報交換を促進

成果：この取り組みを通して運営者の「意識の向上」「活動を継続するためのモチベーションアップ」が図れた。子育てサロンの参加者からは「声をかけてくれると安心する」などの反応があり、母親にとって安心感を与える支援が自然とできるようになってきている。また、子育てサロンの中で気になる親子がいれば、保健師に情報提供するなど、子育て支援者として成長してきている。子育てサロン運営者から、「やりがいを感じている反面いつまで継続できるか不安」「一緒にサロンをしてくれる人がほしい」と人材不足に関する不安の声があがったことから、子育てサロンの継続と地域定着だけでなく、新たな支援者を開拓する必要性の気づきにもつながった。



(2) 子育て関係機関・団体同士をつなげる（ネットワークづくり）取り組み「子育てcafe」（H21～25年度）

目的：水島地区全体の関係機関*³、団体*⁴を対象とした、関係者間の交流やネットワークづくり

内容：「子育てCafé」と称して互いの活動内容の情報交換やテーマに沿ったグループワークを実施

成果：子育て関係機関・団体同士が一同に会することで、顔の見える関係づくりにつながった。他団体の活動を知ることにより、子育て支援者が情報提供できる幅を広げることにつながり、結果的に子育て資源利用者の増加にもつながった。また、子育て資源を利用していない親子が全体の50%もいる（H25年度倉敷市子ども・子育て支援制度に関するアンケート調査より）という結果を受けて、「子育て資源を利用していない親子への取り組みが必要」など、地域全体にも目を向けた発言が子育て支援者から聞かれるようになってきた。さらに子育て支援者から「より身近なレベルでの話し合いがしたい」という発言もあり、地区全体を対象に実施した「子育てcafe」が、より地域に密着した形で新たな子育て支援者を増やしていく取組みの足がかりとなった。

*3 関係機関：子育て支援センター、子育て広場（幼稚園の園庭開放）、つどいの広場（親子で集える遊びの場）。

*4 団体：子育てサロン運営者、主任児童委員、愛育委員、栄養委員、親子クラブ（就園前の親子が集まる自主的なグループ）

活動成果報告書

(3) 新たな子育て支援者を増やしていく取り組み「プチ子育てCafe」(H26年度)

目的：子育て資源を利用しなくても“親子が生活の場で自然(あたり前)に見守られる地域”を目指し、新たな子育て支援者を増やしていく。

内容：親子により密着した生活圏での開催をねらい、概ね中学校区の地域住民を対象とした「プチ子育てCafe」を開催した。開催に向けての企画及び参加者募集の声かけは、今までの活動を通じて成長してきた子育て支援者と協働で行った。

成果：子育て支援者によるロコミ戦略の効果で、新たな子育て支援者となる可能性のある参加者が多く集まった。参加者から、「声かけや挨拶等の支援が大切」「自分にできることからやってみる」など前向きな意見が聞かれている。また、地元密着型の小さな単位で地域の特性に合わせた子育て支援の体験に取り組むことで、身近な子育て支援へのきっかけになるとともに子育て支援に対する不安が払拭され、自信や楽しみへと変化した。これは「プチ子育てCafe」参加者を対象としたアンケートで参加者中 86.1%が「子育て支援をやっている・やりたい」と回答していることから、明らかであり今後も新たな子育て支援者による子育て支援活動が期待できる。

生活圏の近い住民同士が集まることで、より具体的かつ実践的な話し合いや体験に繋がっている。

子育てcafeとプチ子育てCafeの 実施回数・内容・参加者数 (H26年12月末)

	内容	回数	参加者数
子育てcafe	話し合い	1回	53人
プチ子育てCafe	話し合い	11回	246人
	体験	8回	187人
	計	19回	433人

話し合い



体験(運動会)



◇特にPRしたいこと及び今後の計画

1) 特にPRしたいこと

より身近な場で子育て支援について話し合える場「プチ子育てCafe」が、水島地区における子育ての現状と課題を生活圏の近い住民同士で共有できる場、地域密着型で新たな子育て支援者を発掘するための場としての機能を発揮し始めている。従来の子育て支援者が、きらりと光る新たな支援者へ声をかけるしぐさを意識的に実践したことで、能動的に動くことのできる人材が自然と数多く集まってきている。また住民主体を意識しつつ、保健師も積極的に活動に参加することで、従来からの子育て支援者、新たな子育て支援者になりうる人材と保健師との関係も確実に強化されてきている。これらの取り組みと成果は、“親子が生活の中で自然(当たり前)に見守られる地域”“地域が子育て”の土台となり、今後更なる発展が期待できると考えている。

2) 今後の計画

(1) 新たな子育て支援者を増やしていく取り組み「プチ子育てCafe」の継続

新たな子育て支援者を増やし育成していく「プチ子育てCafe」の取り組みは、取り組み始めて間もないが確実に成果が現れている。関係機関・関係課とその成果を話し合い共有した結果、H27年度以降も予算化して事業を継続していく道筋となった。今後も今まで成長してきた子育て支援者と共に、新たな人材発掘・育成を長期継続的に積み重ねていき、誰もが“地域が子育て”していると言えるような地域へと醸成していきたい。

(2) 近い世代の母親の支援者の発掘・育成及び直近世代の母親同士がつながる仕組みづくり

「プチ子育てCafe」の取り組みで発掘・育成してきた子育て支援者は、50・60歳以上が占める割合が多い。これらの支援者が行うあたたかい声かけや見守りは、「周囲の人に支えてもらって安心して子育てができる」という母親の育児の安心感に繋がることで、母親の育児の孤立対策となる期待は大きい。しかし子育て中の母親は「最近の育児を経験した先輩ママからの具体的な子育て情報やアドバイスがほしい」というニーズも持っている。このニーズに応えていくために、次のステップとして、母親と近い世代の子育て支援者の発掘・育成及び母親同士がつながれる仕組みづくりを展開していきたい。